

水俣病 補償交渉始まる

互助会、要求書渡す

社側に額の明示を要望

水俣病の公害被害後初の補償交渉は八日午後四時半からチツソ水俣交社第一会議室で、水俣病患者家族互助会の山本会長と交渉委員と入江専務らチツソ首脳部との間で、行なわれ、同七時まで二時間半にわたって協議、結局話し合いがつかず、二十日前後の第三回交渉に持ち込まれた。

同日は入江専務ら会社首脳陣の水俣入りが遅れたため、予定時刻より三十分遅れて話し合いに入った。互助会側は山本会長、中津副会長ら執行部と補償交渉委員十一人の計十五人、会社側は交渉責任者の入江専務、吉川取締役、徳江

から第一会議室で会社側、互助会側は秘密会で行なわれ、話し合いが終わったあと同七時十五分



会社側（左から徳江支社長、入江専務、吉川取締役）に補償要求書を手渡す山本互助会長、

側同席で記者会見し、交渉の経過などを語った。概要次の通り。まず山本会長から六日の臨時総会で決定した補償要求額①死亡者に対する一時金として二千三百万円②生存患者は年金六十万円を宛病当時にさかのぼって支払う③生存者が今後死亡したときは、一時金として強制自動車損害賠償保険

対決でなく話し合いを

解説

水俣病に対する補償交渉がいよいよ始まった。公害補償は水俣病が初めてのケースだけに各方面からの注目を集めている。第一回交渉は予

解れることだ。

互助会としては今後会社側との間に基本線として自主交渉を進めるが、会社側が早い時期に補償額を明示しない限り互助会としては会社側の「誠意」を問題として今後かえって問題をこじらせる結果になりかねないことが心配される。交渉の過程において両者の「駆け引き」もあつたが、要はあれほど悲惨な被害者を繰出した水俣病である。互助会対チツソの対決では不血の通った「人間対人間」の話し合いが最も大事なことはなかつたか。(鬼塚)

会社側が補償額についての大体の腹案がないとは思われない。ただ互助会の要求額と会社の腹案に相違の開きがあることは当然予想さ

いさつした。これに対し入江専務は「あくまで互助会の自主交渉の立場を理解して、今後納得のいく話し合いを進めていきたい」とあいさつした。

引き続き中津互助会副会長から補償要求額を決めた経過を説明したあと両者話し合いに入り、まず

互助会側から会社側に對し「先に江頭社長から互助会員の自名や入院先を回し個別におわびのことは受けたが、会社としてのわびの気持ちを支辨として各人に渡しておいてほしい」と要望。入江専務は「社長とも相談し要領通り近く文書で改めておわびする」と約束した。

続いて本論に入り「三十四年に作られた従来の契約書を白紙に返して交渉に応じるか」との互助会側の質問に会社側は「白紙に返すということではなく、交渉は従来の契約書にとられずに進めてゆく」と微妙な回答を行なった。

また補償額について互助会側から「会社側の具体的な額について示してほしい」と強く要望したが、会社側は「公署認定の補償額については初めてのケースで直ちに本社で検討を始めるが、あらゆる角度からの算定法を検討しなければならぬ」と答え、具体的な数字は示さなかつた。交渉委員の中から「次の交渉のさいは必ず会社側の補償額を示してほしい」と強硬な意見が出たが、会社側は

「いまのところいつ示せるかはつきりわからないが次回ではより前進できる内容をもって交渉を進めてゆくつもりだ」と回答した。約二時間半にわたる話し合いはその後進展せず、第二回交渉に持ち込まれたが、今回は会社側から日取りを決めることになり、二十日前後の予定。互助会側の申し入れにより交渉日の五日前に互助会に連絡を取るようになった。

“がんばれ”の声あとに

結論物語る暗い表情

水俣病患者家庭互助会とチツソ

との第一回補償交渉は、八日午後四時半からチツソ水俣工場で開かれた。全国でも初めての公害補償交渉だけに、まず金額の算定基準から論議を呼び、第一回の話し合いとしては二時間半という長い交渉となった。席上会社側は「具体的な金額の明示はいつになるかわからない」との感嘆を示し、今後の交渉のむづかしさ、複雑さを

◆山本互助会長の話　もう少し

前回きの回答があるかと予想していたが、きょうの話し合いに関する限り会社側の「誠意」は見られなかつた。何回交渉を重ねても金額が明示されなければ意味がない。いまのわれわれにとつては、次回の交渉までの期間が一年にも二年にも感じられるくらいだ。次の交渉の内容を見て今後のわれわれの態度を決めたいと思つてい

思われた。

○：交渉開始予定三十分前の三時半ごろには互助会員がチツソ正門前に集まつた。自主交渉のスタートだけにこの顔も緊張した面持ち。小雨の降る中をいよいよ山本会長、中津副会長が交渉委員が工場内に向かうと、外に残つた会員が「しっかりがんばってくれ」と激励の声をかけた。工場側もいづつもと違つて緊張したふん開

る。

◆入江チツソ専務の話

私が一応交渉担当の責任者になつてゐるが、補償金は会社にとつて大きな問題だけに社内で役員会で十分検討しなければならぬ。したがつてすぐ金額を明示するというわけにはゆかない。また算定基準もこれまで前例がないのでいろいろこれから検討したいと思つてい

で、正門の守衛を増員して出入り

の人や車に気を使つていた。

○：第一会議室が交渉会場に当てられたが、警備隊はシャットアウト。最初山本互助会会長が会社側に要求書を手渡すところまでであとは隣の応接室に待機という形。ときおり互助会員のカン高い声が隣室まで聞こえ、会場の重苦しい空気が伝わってくる。二時間半後やつと話し合いが終つた。部屋

から出てくる互助会側の交渉委員の充血した目と疲れた暗い表情がこの日の結論を物語つていた。中津副会長は「会社側は二十日前後に予定されている二回目の交渉でも金額の明示はできないと回答した。早く金額を示してもらわないとわれわれはじつとしておれない気持ちだ」とあせりの色を見せていた。

○：工場正門わきのチツソ商工会館では十数人の互助会員が残つて、いまかいまかと話し合いの終わるのを待つていた。ようやく交渉委員が引き揚げてくると、さうそく事の成り行きを聞いたたしていたが、思ひのほか話し合いが進展しなかつたことを知つて、やや落胆の表情。「公害認定後相当期間がたつてゐるし、当然新たな補償交渉が始まることはわかつてゐたのに、会社側はいままで何をしていたのか」という声もチツソホラ。これまで会社側が再三口にしてきた「誠意」に期待をかけていた互助会員は、現実の補償交渉の「腹いせ」を改めて知らされた様子だつた。